

猫股と老婆

福田鼠

友人のT君に誘われ、近所の山に行くことにした。ぐるりと一周散歩でもしないか、という事だ。自分も珍しく特にやる事も無かった。近頃は随分と忙しかった。それでも、何をしていたんだか思い出そうとしても、何をしていたんだか、皆目分からない。

雨がそろそろ降っていて、梅雨の時期かしらんと思って、カレンダーを探してみたんだけど、見つからない。でも、多分梅雨にはまだ早いような気もする。下駄箱から先日引っ張り出したサンダルを突っかけ、傘をさして歩くには丁度良いくらいの雨である。だが、実際に歩いてみるとピチヨピチヨ泥が跳ねて気持ち悪くなってきた。おっかさんに昔、歩き方を怒られたような事を思い出した。

「ずるずる歩いてはみっともないよ」

T君は、道端の自動販売機コーナーの屋根の下で待っていた。Yさんもいらして、実際に会うのは初めてで深深と礼をすると、Yさんも同じように礼をした。

「今日はYさんに誘われてね。福田君も誘おうかなと思ったんだ」

Yさんの作っている雑誌は、自分も、T君も毎回読んでいて、とても尊敬をしている人だった。髭を顎から揉み上げまで伸ばし、色が入った大きな眼鏡をかけている。

一時間に一本ほど走る市のバスに乗り、山に向かった。

「今日は良い具合に雨が降りましたな」

そういつて、Yさんは自分に二、三、質問を投げ、自分は二、三の回答と、サンダルについて話した。

「サンダルも悪くないでしょう。多少、汚れるかもしらんが、問題は無いでしょう」

とのこと。

だらだら曲がった道をバスは進み、山のふもとで我々は降りた。「どこまで乗っても二百円とは何だかおもしろいね」 などT君は言いながらバスを降りた。

山の道は、幸運にもセメントで舗装されていて、泥はそんなに飛び散らずに済んだ。その代わりに、三人で歩くには道は随分と狭かったのだ、一列で歩かなくちゃいけなかった。道の両方に木が立ち並んでいる。森とも、林とも言い難いような程度であったが、随分並んでいた。Yさん、T君、自分の順に一列になって、歩いた。

「女の子はどうしたね」とYさん。

「特にどういう事もありませんよ」とT君。

「君の女は啄木鳥だったかな、雀だったかな」と自分が聞くと、

「付き合う女はみんな啄木鳥になるだろう」とYさんが返す。

暫く歩くと、木の並びも開けて、代わりに麦が並ぶ道になった。その頃には雨も上がっていて、我々は傘も閉じて歩いていた。麦になって少しすると、セメントの道から少し離れて、老婆が座っていた。気味の悪い老婆だった。

「こんにちは」

Yさんが言う。Yさんは知り合いなのだろうか。T君も、自分もそれに倣って、声を掛けた。気味の悪い老婆だなと感じたが、不思議と自分はその老婆の知り合いな気がした。

道が二本に分かれていて、片方には何匹かの猫がいた。先ほどの老婆が後ろから来て、追い抜かし、猫のいないほうに行ったので、Yさんは猫のいる方に向かって歩き出した。T君もそれについて行った。自分は、何でかそれについて行かなかった。

暫く、ぼんやり立ち止まっているとYさんと、T君の悲鳴がして、見ると、先ほどの猫は人ほどの大きさになって、Yさんたちを追いかけている。化け猫であつたらしい。

どうしたものかとおろおろしていると、先ほどの婆さんが戻ってきた。その頃には、Yさんたちは先の方に走って行ってしまっていたので、婆さんに事情を話すと、我々是一緒に走って、Yさんたちを追った。

「黒の猫股で無けりゃ良いが」

婆さんは何度もそう言いながら走った。歳老いているとは思えない程の足の速さで、自分は追いつくので精一杯だった。

追いついてしまうと、YさんとT君は地面に倒れ、黒の化け猫か、猫股かは分からないが、それに睨まれていた。

「猫股であつたか」

老婆は、そう言い、その黒の猫股に近づいて行く。自分は、足が他人のものみたいに躊躇と震えて、しゃがみ込んで、それを見ている。

「これこれ」

そういつて、老婆は何度も猫股の頭を軽くぼんぼんと叩くと、猫股は老婆の方を見て、低いような高いような嫌な鳴声で唸っていた。

「これ、わしを忘れたか」

コツンと軽い拳固を入れると、途端に猫股は、おとなしくなつて、老婆と二人ですつと消えてしまった。

消えてしまったと思うと同時に、サーとまた雨が降ってきて、我々は、山の麓で三人で腰を抜かしていた。

(了)